

来街者の行動・意識からみた都心部街路空間の評価に関する研究*

- 福井市トランジットモール等社会実験を事例として -

A Study on the Evaluation of the Street Space in the City Center from the Viewpoint of Activity and Consciousness of the Town Visitor*

- In case of Experimental Scheme of Transit Mall in Fukui City -

川上 洋司**・堀井 茂毅***・川本 義海****

By Yoji KAWAKAMI **・Shigeki HORII ***・Yoshimi KAWAMOTO ****

1. はじめに

福井市の都心部では、他の多くの地方都市がそうであるように、現時点はもちろん将来的にみても都心部の活力低下が大きく懸念されている。このような状況に鑑み、福井市では平成 11 年に中心市街地活性化基本計画を策定し、再活性化に向けたさまざまな取り組みを展開している。その動きの一つとして、平成 13 年 10 月 12 日から 11 月 4 日の 24 日間、都心部における歩行者優先の街路空間を創出するものとして福井駅前電車通りでトランジットモール等の社会実験が実施された。車中心の地方都市の都心部において一時的ではあったがこのような空間が生み出され、多くの人々からさまざまな評価を得ることができたことは特筆すべきことである。

本稿では、このトランジットモール等社会実験をつうじて得られた調査結果をもとに、今後都心部においてより一層求められるであろう来街者の回遊性や都市の魅力の向上といった視点から歩行者中心の新たな都市空間の創出がどのように評価され、またどのような意義を持つのかについて考察する。

2. 街路空間の評価の視点と調査内容

歩行者中心の街路空間を評価するにあたり、賑わいのある都市空間を生み出すことが都心部の活力向上につながるという仮説にもとづき、ここでは都心街路空間の改

変前後における来街者の増減、来街者の滞在時間の変化について分析することとした。

トランジットモール（以下、「TM」という）期間中の駅前電車通りを通行中の歩行者に対し、来街に関するアンケートを配布し、後日郵送回収をおこなった（TM 期間中の 17 日間（10/12～10/28）のうち平日 1 日、休日 1 日に配布。配布総数 3,200 票、回収数 676 票、回収率 21%、有効票数 658 票）。なお回答者内訳の概要は、男性 44%、女性 56%、50 歳代 19%、30 歳代 18%、40 歳代 17%、20 歳代 17%、60 歳代 16%、70 歳以上 9%、10 歳代 4%、福井市内居住 74%、市外居住 22%、県外居住 4%、TM 実験を知っていた 69%となっている。

3. 来街者の滞在時間と回遊性

TM 実験時における来街者の都心滞在時間を示したものが図 - 1 である。平均滞在時間は 108 分であり、1 箇所みの立ち寄りや素通りといった 30 分未満の滞在者が 2 割を占め、3 時間以上の長時間の滞在者は 10%ほどしかないことが明らかとなった。

次に回遊性について、滞在時間との関係から考察したものが表 - 1 である。都心部に長く滞在した来街者ほど

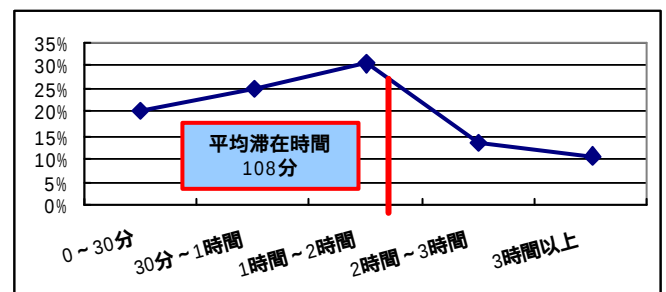


図 - 1 来街者の滞在時間（通勤・通学目的を除く）

表 - 1 滞在時間と回遊性の関係

滞在時間	広く回遊	平均立ち寄り数	平均滞在時間
長い (108 分以上)	66%	3.37 回	189 分
短い (108 分以下)	43%	2.29 回	52 分
全体	53%	2.74 回	108 分

*キーワード：市街地整備、空間整備・設計、交通計画評価、地区交通計画

**正会員 工博 福井大学工学部建築建設工学科
(910-8507 福井市文京 3-9-1, TEL&FAX 0776-27-8608
E-mail: yoji@anc.anc-d.fukui-u.ac.jp)

***非会員 福井大学大学院工学研究科
(910-8507 福井市文京 3-9-1, TEL&FAX 0776-27-8608
E-mail: b9861sh@anc.anc-d.fukui-u.ac.jp)

****正会員 博(工) 福井大学工学部建築建設工学科
(910-8507 福井市文京 3-9-1, TEL 0776-27-8763, FAX 0776-27-8607
E-mail: ykawamot@anc.anc-d.fukui-u.ac.jp)

立ち寄り先も多くなっており、また広く回遊していることがわかる。

また TM 前と TM 時における都心部での滞在時間と滞在時間の変化をみると、滞在時間については表 - 2 のように約半数が「変化なし」であったものの、「長くなった」とする人が「短くなった」とする人を若干上回る結果となった。しかし表からも明らかなように、TM 時の滞在時間が長い人は「長くなった」とする比率が高い一方で、逆に短い人は「短くなった」とする割合が高くなっていることがわかる。これより TM 時の滞在時間による TM 前後の滞在時間の変化の中には TM 実験空間に対する評価が影響しているものと考えられる。また表 - 3 より、滞在時間が長くなることにより立ち寄り数が増加するとともに回遊性が高まっていることがわかる。

表 - 2 滞在時間と滞在時間変化の関係

滞在時間が	長くなった	変わらない	短くなった
長い (108 分以上)	18%	20%	2%
短い (108 分以下)	8%	30%	21%

表 - 3 滞在時間の変化と回遊性の関係

滞在時間の変化	広く回遊	平均立ち寄り数	平均滞在時間
長くなった	69%	3.44 回	156 分
変わらない	55%	2.74 回	107 分
短くなった	32%	2.03 回	53 分
全体	53%	2.74 回	108 分

4. 滞在時間の変化と街路空間に対する評価

TM 実験空間の印象による街路空間に対する評価を示したものが図 - 2 である。「良い」= 1, 「変わらない」= 0, 「悪い」= - 1 とした場合、滞在時間が長くなった人と短くなった人で平均評点の差の検定を行った結果、1%の有意水準で差があることがわかった。これにより、都心部での滞在時間と街路空間に対する評価の間には有意な関係が存在すること、すなわち街路空間の印象を高めることが滞在時間の増加につながることを示している。

次に TM 実験空間の印象に及ぼす影響要因をみたも

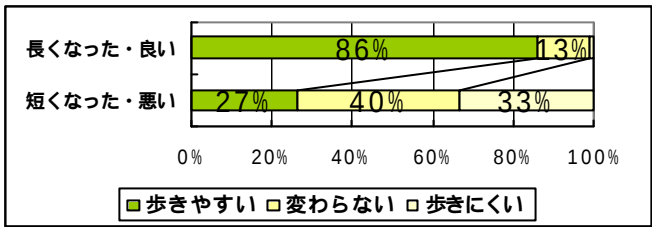


図 - 3 滞在時間の変化と歩行空間の印象

のが図 - 3 である。印象が良い人の傾向として、「安全性」、「歩きやすさ」といった歩行環境、また「植栽」、「商店街の印象」といった沿道環境を高く評価していることがわかる。印象の悪い人は「横断のしにくさ」や「自動車や自転車の乗り入れ規制」の問題を指摘する傾向がみられる。

以上により、TM 化がもたらす歩行環境や沿道環境の向上が街路空間の評価を高めること、またこれが都心部での滞在時間の増大に結びついていること、しかしその一方で横断のしにくさや車のアクセス面が問題となり滞在時間の減少もたらす可能性もあることがわかった。

5. まとめ

社会実験の目的の一つとして、実験空間における実体験を通して人々の関心や意識を高めるということがあげられる。今回の実験では来街者の 4 割以上の人が都心部の空間や車利用のあり方に対して考え方が変化したとしており実験の成果はあったと考えられる。また現状のままで良しとする人はほとんどみられず、都心部の街路空間の抜本的な改善意向が高いことも確認できた。以下に本研究により得られた成果を示す。

都心部での滞在時間変化と街路空間評価との間には有意な関係があり、評価を高めることにより滞在時間を長くできる可能性がある。

TM 化によってもたらされる歩行環境・沿道環境の向上は高く評価されており、都心部における安全で快適な歩行空間の整備が都心部のにぎわい創出にとって重要である。

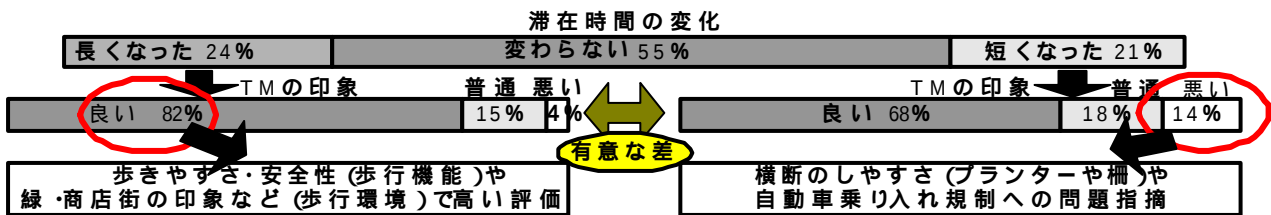


図 - 2 滞在時間の変化に及ぼす影響要因